

若松英輔

(わかまつ えいすけ)

略歴

一九六八年生まれ。批評家・随筆家。東京工業大学リベラルアーツ研究教育院教授。二〇〇七年、「越知保夫とその時代」にて三田文学新人賞「評論部門」、一六年、『叡知の詩学 小林秀雄と井筒俊彦』にて西脇順三郎学術賞、一八年、詩集『見えない涙』にて詩歌文学館賞「詩部門」を受賞。著書はほかに、『井筒俊彦』（慶應義塾大学出版会）、『魂にふれる』（トランスビュー）、『生きる哲学』（文春新書）、『靈性の哲学』（角川選書）、『イエス伝』（中央公論新社）など。



〈受賞のことば〉

読まれた文字はつねに、読み手のちからによって新生したもので、しばしば書かれたときよりも豊饒な意味を有するものです。本作に与えられた榮譽も、選考委員の皆さんのそのような助力があつたために違いありません。

また、書物は書かれたときではなく、編集者、校正者、装丁者の参与があつて初めてかたちを帯びます。このたびの光栄をこの同志たちと共に喜びたいと思います。

この作品にはもうひとり重要な協同者がいます。越知保夫です。彼は一冊も著書を遺すことなく一九六一年に亡くなりますが、その遺稿集『好色と花』の冒頭を飾る「小林秀雄論」は、数多ある小林論のなかできわめて独創的だけでなく、小林以上に、小林の精神に肉薄した秀作です。

十代の終わりが、師である井上洋治神父を通じてこの人物とその作品を知り、以来、私にとって書くとは、彼が病のためになし得なかったことを実現することと同義になりました。この著作に良きところがあれば、多くを越知保夫に負うことをここにお伝えしないわけには参りません。この機会に彼の言葉がよみがえることを切に願います。